

日本フランス語フランス文学会

cahier

25

mars 2020

II 書評

吉井亮雄（著）『ジッドとその時代』、九州大学出版会、2019年

評者：小坂美樹（大阪大学）

ジッドの実証研究者として、日本はもちろんフランスでも第一線で成果を挙げ続ける著者の長年にわたる業績をまとめた総頁数 670 の大著である。

「現実と虚構とが分別しがたい自伝空間を生きる」ジッドの作品を、著者は「行為と書物とが捻れあい織りなす〈生〉の総体そのもの」と呼ぶ。その独特で複雑な「作品」を理解するためには、テキストを読みこみ小説技法を解明すると同時に、創作行為にかかわるすべての資料を実証的に検討しなければならない。著者の調査・探索により見つかった、もしくは筐底や書庫に眠っていた膨大な資料（下書きや写しを含む書簡や、日記の未発表記述、文芸誌掲載の書評など）が解読され、惜しげもなく提示される。本書で活字化された未刊資料は、書簡だけでも実に 140 通におよぶ。圧倒的な情報量と各文献・資料の重要性からも、本書はまさに現時点で望みうる最高の到達点と言えるだろう。

5部構成（各部は4ないし5章からなる）の本書では、ジッドの文学修行時代から晩年へと順に論考が配置される。各部冒頭で伝記的事実が概観され、作家とその時代背景を確認したうえで、具体的な事例へと進む。過半の章題が「ジッドと～」とあるように、作家が特定の相手と結んだ個人的な関係について未刊資料を軸に検証がおこなわれる。目次を一瞥するだけで相手の国籍、年齢そして知名度の多様さに驚かされるであろう。ヴァレリーやチボーデ、アンリ・マシスなどとともにリルケやトルストイ、タゴールが並び、さらには盛澄華（中国人フランス文学者で複数のジッド作品を翻訳）、アンドレ・カラス（50歳年下の文芸ジャーナリスト）といった無名に近い文学者らの名もあがる。自らをプロテウスと称したジッドの長い文学人生の多様な「切り子面（ファセット）」の相応数を示したに過ぎないと著者は控えめに述べるが、活字化された資料は当時のフランス文学を取り巻く状況を生き生きと伝え、また書簡や日記は作家の喜びや不安を直接に映す。文通相手からの敬意あるいは敵意を前にしたジッドの態度は、個々の相手や内容により異なるものの、そこに一貫するのは対話・応接を継続せんとする堅固な意志である。手紙の下書きなどが示すように、感情にまかせて綴られた文章が書き直されるにつれ、ジッドのなかに生まれた「作家的意識」によって冷静さを取り戻してゆく過程も興味深い。「対話的存在」であるジッドにとっては書簡もまた一つの作品なのである。

定説への疑問から出発し、資料を粘り強く発掘し、解読したうえで別の資料と

つきあわせる作業は決して華やかなものではない。しかし、そうした地味で地道な仕事を重ねることで作品解釈の精度は上がる。従来「ない」とされてきた資料が次々と示され、不明な部分の多かった相手との交流が明らかになるだけではない。何一つゆるがせにしない著者の姿勢は、権威と認められている研究者の著述に対しても、実証的な裏付けをもとに反論し、修正を加えるのをためらわない。

いずれの論考も、未刊資料をもとに通説が覆され、新たな解釈が展開される刺激に満ちているが、とりわけ著者がかつて校訂版を作成・公刊した『放蕩息子の帰宅』についての章（第Ⅱ部第3章「状況に想をえた小品——『放蕩息子の帰宅』の生成、作品の読解、同時代の反響」）において、資料を実証的に読み解きながら、作品の本質に迫る手さばきは実に鮮やかだ。ジャムやクローデルとの宗教的議論によるジッドの心理的葛藤が未刊の書簡や日記記述からあぶりだされ、カトリック作家たちへの返答として作品が生成してゆく様子が示される。そしてジッドの心理的葛藤は芸術的意識へと昇華され、作中の一人称による「語りの二重性」へとつながることが説得力をもって指摘されるのである。

それぞれの章末におかれた註がきわめて詳細・精確である点も特筆に値しよう。各資料の典拠が明示されるのは言うまでもないが、資料の性質から閲覧が難しいもの、また存在は確かながら所在不明のものなどに関してもその由が記される。未刊の文献・資料については物質的側面にも言及があり、本文中の論拠を支える。本書をつらぬく実証的検証の厳密さと、詳細な註により研究者への便宜を最大限にはかろうとする誠実さは、著者がジッド研究の泰斗クロード・マルタンから直接に受け継いだものである。また巻末の30頁におよぶ補遺（「ジッド書誌の現状——参考文献一覧に代えて」）では、ジッド研究の歴史と現状が項目ごとに詳述され、今後取り組むべき課題を浮かび上がらせる。

当然のことながら、ジッドについては今後も新たな資料が出てくるだろう。それらが本書で判断の保留されている箇所を補い、時には解釈の変更を迫る場合もあるかもしれない。実証研究においては、調べ尽くされ、もはや足すものは何もないといった幸福な例外はまず有りえない。しかしジッドの総合的な「生」への接近をこころみる著者はむしろ新たな驚きの到来を待ちのぞんでいるのではないか。探し続ける者のもとにのみ、失われていた過去からの手紙は届くのだから。まさに「ジッドとその時代」についての知見を深めたい者にとって必読の書。なお、印刷や造本・装丁も美しい本書は、2018年大阪大学に提出され、審査員諸氏の絶賛を博した学位論文をもとにしている。